

我が国のリゾート成立における 欧米リゾート思想の影響

How the Western Resort Concept Effected the Development of the Japanese Resort

安島博幸* , 西澤倫太郎**

By Hiroyuki YASUJIMA and Rintaro NISHIZAWA

The purpose of this paper is to explain how the western resort concept was introduced to Japan in the Meiji and the Taisho periods.

The following points will be studied:

- 1) Western resort areas in the 1800's.
- 2) History of some famous resort areas in Japan.
- 3) The key persons who contributed to the development of the Japanese resorts.

1. 本研究の背景と目的

本研究は、我国において明治以降に形成された近代的リゾートを中心に扱ったもので、各々のリゾートの成立と展開の過程に加え、当時の外国のリゾートの状況、日本のリゾートの形成に関与した人々の経歴、及び欧米文化の導入を踏まえ、欧米流のリゾートのあり方がどのような経路を通じて我国に定着していったかを明らかにすることを目的としている。

2. 日本における欧米型リゾートの成立と展開

明治初期から、開国により多数の外国人が来日するようになり、欧米流のリゾートが明治20年(1887年)前後から日本の各地に次々に成立していった。特に、当時遠出を制限されていた外国人は居留地から余り離れていない標高のある高原地帯を中心に別荘地開発を行っていった。その他、日本人も那須や

大磯などで、西欧の概念を取り入れてリゾートを形成した。当時のリゾートの分布を(図-1)に示す。

(1) 日光

明治6年(1873)避暑中のJ・C・ヘップバーン博士は、外国人向けホテルの必要性を説いた。また明治14年(1881)初訪以来、一家で避暑を行ったJ・M・ガーディナーも同様の提案を行い、日光初の欧米流ホテル「金谷ホテル」の建築が行われた。この両氏の提案は、

日光の観光地から避暑地への転換を促した。明治26年(1893)には中宮祠における初の外国人公使と御雇い外国人の別荘が建築されていた。これらの別荘は中禅寺湖畔に建てられ、庭先にはボート遊びのために簡易的な棧橋が設けられている。

(2) 那須

1) 農場拠点型別荘

西欧の貴族制度に倣って明治17年(1884)発令された華族令により新貴族となった山県有朋など日本政府高官は、那須において農場拠点型別荘を建築し、

* 正会員 工博 金沢工業大学助教授 建築学科
(〒921 石川県野々市町扇が丘7-1)

**非会員 楠地域開発研究所

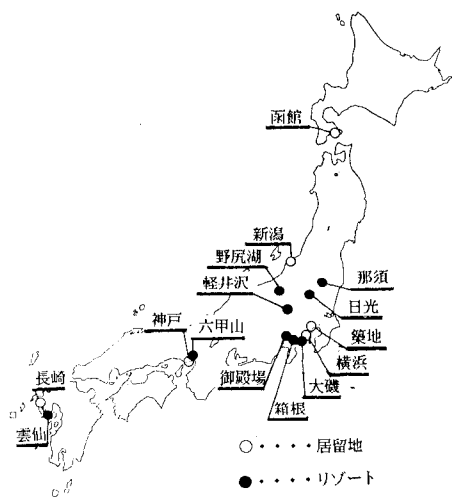
農場経営を開始した。また、それは、英国エリザベス朝末期に新しい勢力を獲得した高級官職保有者たちが、その権勢の証として、まず地方に所領を取得し、そこに新しく豪壮なカントリーハウスを建築した事情に類似している。またこの一連の農場拠点型別荘群は、比較的涼を得にくい低標高の地域に設けられたため、避暑型別荘は、当時の那須には未だ存在していなかった。¹⁾

2) 那須御用邸

大正10年（1921）皇太子（後の昭和天皇）はヨーロッパ歴訪の旅に出かけた折、過酷な予定の中スコットランドを訪ね、唯一緊張から解かれた時間を過ごした。帰国後、那須に思い出深いスコットランドの風景を見出し御用邸の建設を決定した。那須御用邸は、比較的高所に設けられた初の避暑型別荘として、終生避暑や植物研究の場として使用され、また那須のリゾート開発の契機となった。

(3) 大磯、鎌倉

日本における近代海水浴の普及は西欧公衆衛生学に関心を抱く日本人医師やE. ベルツの推奨によるものであり明治17年(1884)横浜海岸通りで開設された海水浴場は大磯から湘南一帯へ次第に波及し、明治中期には政府高官による別荘の建築が開始され、上流階級の海浜リゾートへと発展した。大正末期頃には健康増進に役立つことが一般に認識されていたが、未だ一部の上流階級の独占であった。²⁾



(図-1) 明治中期頃の居留地とリゾートの分布

(4) 箱根

箱根離宮は、皇太子（後の大正天皇）の健康を配慮したE.バルツの進言により、避暑、伝染病御立所を目的として、明治18年（1885）芦ノ湖東岸塔ヶ島半島に造営が開始され、明治20年（1887）完成した。本離宮は以降の箱根における避暑型別荘の出現の契機となった。³⁾

(5) 温泉場：箱根、草津、伊香保

E.ベルツは、来日後、日本人の間に永く伝承されてきた「温泉」に医学的効果の存在を確信して調査を開始し、明治17年（1884）には「持続温浴について」と題した論文をベルリン臨床医学雑誌に報告している。また彼は、単に温泉医学を推奨するだけでなく、内務省に対して日本の温泉場の現況と改善に関する提案を行い、特に箱根、草津、伊香保に対しては、積極的に訪問し指導者となって改善や開発に尽力したが、結局すべて失敗に終わった。

(6) 輕井沢

リゾートとしての軽井沢はカナダ人宣教師A.C. ショウが明治19年(1886年)に訪れ、明治21年に大塚山に最初の別荘を建てたことに始まる。彼は在日外国人に軽井沢が避暑地として好適であることを伝え、そのため外国人の別荘が数多く建てられていく。明治26年以降日本の上流階級の人々も別荘を持つようになった。また、軽井沢ホテル(明治34年)、三笠ホテル(同35年)、万平ホテル(同39年)が相次いで建設され、避暑客のサロンとなった。⁴⁾

(7) 野尻湖

カナダ人宣教師D.ノルマンは、日本に派遣された翌年の31年より軽井沢での避暑生活を始めたが、大正初めより開発が進み、日本人も増えて騒がしくなり、必ずしも避暑生活にふさわしい場所ではなくなってきた。そこで、新たな適地を求めた結果、大正10年（1921年）水辺のある野尻湖に別荘地を開発することになった。野尻湖畔の北向き急傾斜地に位置する国際村の別荘は当時の軽井沢のベランダを持った建築様式（新軽井沢バンガロー）をそのまま受け継いでいる。質素で堅実な生活の理想を求めて野尻湖に移ってきた宣教師たちは、教会やプール、ボートハウスなど必要な施設の建設を自主的な開発・運営組織によって行い、水道や風呂もない質素なバンガローに永く滞在した。また、野尻湖の東南湖畔に

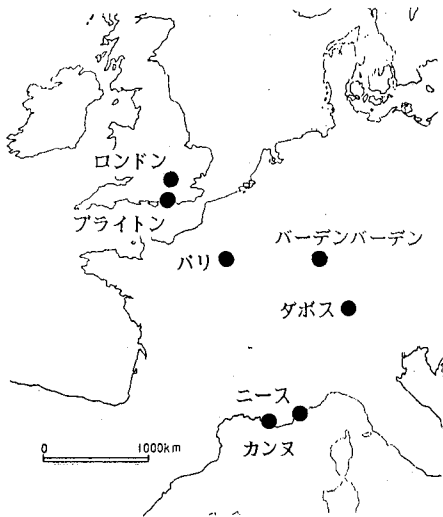
はE.R.カウフマンなどの尽力により昭和初期に建設されたYMCA、YWCAのキャンプ場がある。⁵⁾

(8) 六甲山

別荘地としての六甲山は明治初期、神戸港開港と同時に来日し、神戸に住んでいた英国人貿易商A.H. グルムによって開かれたものである。彼は明治28年(1895年)に六甲山山上の池のほとりに自分の別荘を建てたのをはじめとして、居留地の友人を誘って外国人別荘村づくりをすすめた結果、明治43年(1910年)には別荘数が56戸となった。特筆すべきは、グルムは、日本で最初のゴルフ場を造り、明治36年に神戸ゴルフクラブを設立したことである。グルムらは、ゴルフのみならず登山やハイキング、冬季にはスキー、スケートなど六甲山をレクリエーション、スポーツの場として利用した。⁶⁾

2. 外国における当時のリゾートの状況

当時のヨーロッパでは、海浜保養地としてイギリスのブライトン、フランスのニース、カンヌ、高原保養地としてスイスのダボス、ドイツの温泉保養地など多様なリゾートが展開されていた(図-2)。



(図-2) 欧州におけるリゾートと主要都市

(1) イギリス：ブライトン⁷⁾

1) ヘルスリゾート・ブライトン

英国における海水浴場は、スパーの全盛期にはひなびた漁村にすぎなかったが、南海岸の代表的海水浴場ブライトンは、18世紀半ばには既に海水浴の医

療的効果を確信する医師達による推奨により、冬期におけるヘルスリゾートとして有名であった。

2) ロイヤルリゾートへの変身

1783年の初訪以来、ブライトンを気に入ったジョージ3世の皇太子は、1787年離宮を建設して避寒滞在を開始し、これに誘引された多数の貴族やジェントリ達の豪勢な生活によりロイヤルリゾートの様相を呈した。19世紀初頭のブライトンは、皇太子の避寒地としての名声をより一層高め、「冬の都」として発展し続けた。

3) 大衆化と海浜リゾートの成熟

1841年の鉄道開通は、旅程短縮と運賃軽減により来訪者の枠を広げ、また大衆化に拍車をかけ、夏期のシーズン化を促した。

(2) フランス

1) 冬期避寒型ヘルスリゾート・ニース

ニースが避寒地として台頭し始めたのは19世紀初頭からで、主な避寒客は英国人であった。彼らは、バイヨン川の西に別荘を建築し、新市街地を形成して避寒を開始し、サルジニア政府は乱開発を恐れ建築規制を制定し都市計画を作成し新市街地の建設にあたった。

2) ロイヤルリゾートへの変身

1864年フランスとの鉄道開通はビクトリア女王を始めとする王侯貴族の来訪を促し、20世紀初頭にかけてニースは「ヨーロッパの冬の首都」と呼ばれロイヤルリゾートの様相を呈し、急増する上流避寒客のための諸施設整備も進展した。

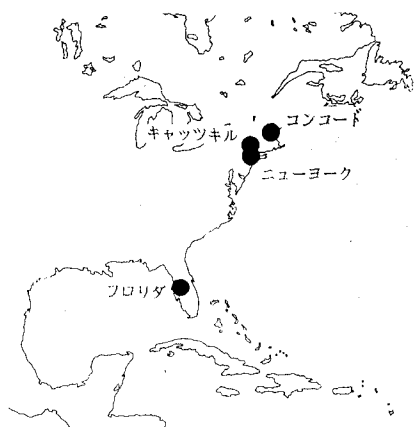
(3) ドイツ

ドイツの温泉地の起源はローマ人が発見し、開発したものが多く、18世紀以降のバーデン・バーデンや王侯の温泉と称されたバートエムスはドイツやロシアの王侯貴族の来遊も多く療養、保養ばかりでなく、上流階級の社交の場として有名であった。医療としての温泉療養は経験的に発展してきたものであるが、飲泉療養は17世紀には療法の中心的存在になっていた。19世紀に入ると分析化学や薬理学が長足の進歩をとげ、あらゆる温泉が精密に分析され利用されるようになった。E.ベルツはバーデン・バーデンから近い南ドイツの小さな町で生まれている。

(4) アメリカ

米国におけるリゾートは双極的に進展している。

一方は宗教色を帯びた質朴なリゾートの展開であり、その対極がミリオネアのリゾートである(図-3)。両者とも、北部の大都市住民を対象として発展していく。



(図-3) 米国大陸東部におけるリゾートと主要都市

1) 宗教活動を核としたリゾート・キャッツキル

米国におけるリゾートの一方は19世紀中葉に近代機械文明の物質主義に対する批判から自然への回帰が強く求められたことに始まっている。その代表者に師R.W.エマーソンの説いた超絶主義を実践し、読書と自然観察に一生を捧げたH.D.ソローがいる。リゾートのルーツとされるのは、1835年のメソディスト派による宗教リバイバル運動にあり、マサチューセッツ州のマルタ・ビンヤードにおけるJ.ウエスレー(メソディスト派創始者)によるキャンプ・ミーティングに集まった善男善女が、家族毎に説教者を取り巻く形でキャンプ生活をしていたことである⁸⁾。また、クエーカー教徒はその精神に基づいて、ニューヨークから150km離れた山岳部のキャッツキルにモーハンクマウンテンを建設するなど、米国北部の山岳地帯のリゾートは宗教色の強いものであった。

2) ミリオネアのための海浜リゾート・フロリダ

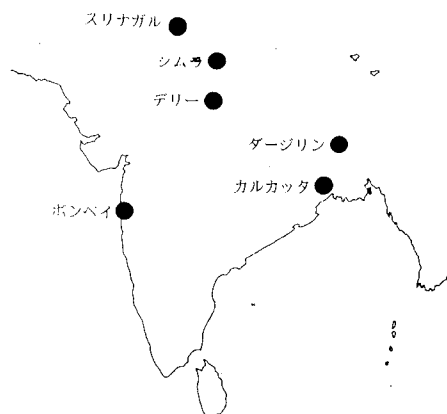
19世紀末の蒸気船の発達は、フロリダへの旅行者の到来と小規模ホテルの建設を促したが、その後避暑保養地としての知名度の向上と鉄道開通により、H.フラグラーによるホテル型高級リゾートが出現し、リヴィエラの避暑客であった富裕階級の誘致に成功しミリオネアのリゾートとしての性格を持つように

なった。20世紀に入り、避暑客によって数々のレクリエーションが導入され、ホテルを舞台とした華やかな社交を中心としたリゾートが発展する。しかし、このタイプのリゾートは日本には導入されなかった。

(5) インド

インドでは古くから過酷な気候条件の克服策として伝統的にその支配者によって季節的遷都が行われ、スリナガルではムガル王朝による避暑地開発がされた。インドにおける植民地支配者となった英国人たちも過酷な気候の克服策として、当時でも夏期の遷都先であったシムラやダージリンなどに代表される山岳地方において避暑地(Hill Station)の開発を開始し、以降の鉄道発達により成熟期を迎え、なかでもインド北部の山岳都市シムラは帝都としての機能も有する「夏の都」として発展した(図-4)。

英国人のインドにおける居留地生活は、仕事と余暇の時間が明確に分離され、大抵の余暇は諸施設の整備された階級別の社交場「クラブ」や公共施設で過ごした。これらの施設や生活様式は避暑地にも導入され、加えて登山、小旅行、狩猟、探検なども展開された。



(図-4) インドにおけるリゾートと主要都市

3. 日本のリゾートの成立と展開に関与した人々

(1) 外国人

開国後来日した外国人は、宣教師、貿易商、技術者などに代表され、また彼らには明治33年(1900)の内地雑居制施行まで、居留地内における居住、営業が義務づけられており、頻繁に行われた小旅行な

どには外務省発行の旅行免状が必要であった。

1) A.C.ショウ (Alexander Croft Shaw)

A.C.ショウは、弘化3年(1846)カナダ生まれ、明治6年(1873)イギリス海外福音伝道会最初の宣教師として、横浜に上陸した。明治18年(1885)伝道旅行の途次訪れた軽井沢に故郷の風景を見だし、明治19年(1886)詳細な検分を経て避暑適地であることを確信した彼は、同年夏、他に先駆けて別荘を構え避暑生活を開始した。また彼は、日本在留欧米人の誘致にも尽力し、明治21年(1888)軽井沢初の教会、英国聖公会聖堂を開設したが、明治35年(1902)没した。

2) D.ノルマン (Daniel Norman)

D.ノルマンは、元治元年(1864)カナダ生まれ、明治30年(1897)カナダメソディスト教会宣教師として来日した。D.ノルマンは、来日して早速の明治30年(1897)軽井沢において「ユニオンチャーチ」の開設に尽力し、翌年避暑生活も開始した。彼は軽井沢の避暑環境悪化を避けるため大正5年(1916)軽井沢避暑団の設立に尽力したが、大正9年(1920)当時軽井沢の喧噪は益々極まり、同年野尻湖への集団移動を指導した。翌年国際村開村にあたり同志の日本人の入村を認めない排他的取り決めに失望した彼は後の避暑生活を軽井沢で送った。

3) E.ベルツ (Erwin Von Balz)

E.ベルツは1849年ドイツ生まれ、明治9年(1876)東京医学校御雇外国人として来日した。また日本滞在中、「温泉」に医学的効果を確認して頻繁に調査を行い、温泉医学を推奨するだけでなく、日本政府に対してその改革に関する提案を行い、積極的に温泉地の開発にも尽力した。

4) J.C.ハップバーン (James Curtis Hepburn)

J.C.ハップバーンは、米国生まれ、アメリカ長老教会宣教師としてアジアでの伝道を経て、一時帰国した後、安政6年(1859)医療伝道と聖書の翻訳・出版を目的として来日した。彼は日光に避暑的価値を見出し、明治6年(1873)避暑滞在中の旅館主人に欧米流ホテル経営のノウハウを教授し、以後の日光における欧米流ホテル出現に多大な影響を与えた。

5) J.M.ガーディナー (James M Gardiner)

J.M.ガーディナーは安政4年(1857)米国に生ま

れ、明治13年(1880)米国聖公会宣教師として来日した。彼は来日後早速、立教学校初代校長就任と並行して校舎建築にも着手し、翌年には日光を訪ね、以来一家は毎夏を日光で過ごすことになる。彼はJ.C.ハップバーン同様日光での欧米流ホテルの必要性を説き、また日光初の欧米流ホテル「金谷ホテル」の建築にも携わった。明治37年(1904)全ての伝道事業から退いた彼は、建築事務所を開設し、明治44年(1910)には、日光にて自らの別荘を設けた。

6) A.H.グルーム (Arthur H Groom)

A.H.グルームは、弘化3年(1846)英国生まれ、シンガポール、香港、上海を経由して、慶応3年(1867)長崎に上陸し、明治元年(1868)神戸に移動した。彼は、明治3年(1870)在留外国人によるアスレティズムにそったスポーツクラブを設立し、明治4年(1871)グラバー商会を退社後、事業のため一時横浜に移住するが、明治23年(1890)神戸に戻りホテル買収を行ない、その収益によって、明治28年(1895)六甲山に別荘を建築してシニアのスポーツ拠点とした。彼は在留欧米人の誘致に尽力し、明治31年(1898)着手したゴルフ場開発は以降順次進展し明治36年(1903)には神戸ゴルフクラブを創設した。六甲山のリゾートは大正初期には賑わいも薄れ、以後彼はホテルを手放し、大正7年(1918)没した。

8) E.R.カウフマン (Emma R Kaufman)

E.R.カウフマンは、明治14年(1881)カナダ生まれ、明治42年(1909)世界旅行中初来日した。彼女は半年の滞在後帰国し、再び明治44年(1911)東京YWCA特志幹事として来日し、大正5年(1916)同副総幹事に就任した。以降、E.R.カウフマンは、野尻キャンプの設立などに尽力し、今日の東京YWCAの基礎を築き、昭和15年(1940)大戦勃発を機に帰国した。

(2) 日本人

明治維新後、日本は欧米の先進文明を規範に新しい日本の建設に邁進した。明治政府は官費による留学を奨励するかたわら、政府高官による視察渡航を展開した。彼らが、その後日本で造営した別荘は渡航の際に眼にした西欧のリゾートのあり方が反映しているように思われる。例えば、山県有朋は明治2年欧州の兵制視察のために、西郷従道とともに、渡

欧し、イギリス、フランス、ドイツ（プロシア）などを巡った。この外遊の際、プロシアでは当時医学を修めるために留学していた青木周蔵に通訳、案内を受けるが、後に山県、西郷、青木は3人とも那須に農場を開き別荘を構えている。

また、岩倉遣欧使節団の一員として渡欧し、プライトンのリゾートとしての繁栄を目の当たりにした伊藤博文は、大磯に別荘を構えた。

軽井沢に日本人として初めて別荘を構えた八田裕二郎も当時としては珍しく3回の渡欧経験がある。

4. 日本に影響を与えた欧米のリゾート思想

(1) 思想

1) 高原避暑

日本の蒸し暑い夏に耐えかねた欧米人は高原に避暑型別荘地を開発したが、これにはインドなどアジアを経由するうちに経験的に学びもたらされたものと、アメリカ北部の宗教的なサマーキャンプがもとになっているものとの2つがある。

《軽井沢、野尻湖、御殿場》 米国における宗教的な色彩の強いサマーキャンプと並行して新教のアジア伝道活動のため、時には東南アジアを経由して、日本を訪れた新教伝道者によって高原避暑型リゾートが軽井沢、野尻湖、御殿場において導入されるが、それらは主に彼らをその構成員とした宗教関係者によるコミュニティであり、また野尻湖に設営されたYMCA・YWCAキャンプは開拓時代の面影を伝えている。そのほかの同属性コミュニティでは、大学教授を主な構成会員とする野尻高原大学村や北軽井沢の法政大学村などが形成されている。

《六甲山》 英国の植民地であったインドにおいては、その過酷な気候条件の克服策として伝統的に行われていた遷都による「夏の都」シムラやゲーザリンにおいて高原避暑型リゾートが展開された。開国により東南アジアを経由して日本に至った英国人は、日本における居留地の一つである神戸近隣の六甲山において高原避暑型リゾートを導入した。

《日光》 開国後来日した外国人は、日本探求の対象地として箱根、日光などに旅行したが、その後避暑に適していることを見いだした。特に日光では、外国人避暑客の増加を見越して欧米流ホテルの必要性が説かれ、ホテルの開設によって、ますます外国

人來訪者が増加した。また日本を勤務地とした欧州各国の外交官などは、明治中期より中禅寺湖畔において自己または各国所有の別荘を設け高原避暑を行った。

2) 温泉療保養

開国後来日したドイツ出身の医師E.ベルツは、日本社会に継承されてきた温泉湯治の効用に変な興味を抱き、特に箱根、草津、伊香保においては、それらの温泉場が国際的な温泉地にも成長し得る素質を保有していることを確信し、母国ドイツにおける温泉保養地を基本とした数々の改革計画を提案し、国際的な温泉保養型リゾートの建設に尽力したが実現には至らなかった。

3) 海浜療保養

日本における海浜療養思想の普及は、19世紀末西欧公衆衛生学に関心を持つ医師らが先駆けとなったが、その後名高い政府要人らの別荘建築によって上流階級による海浜保養型リゾートが出現し、昭和初期の鉄道開通は大衆の動員を誘い、中央資本の参入も促した。その後次第にレクリエーション的色彩が強まり、大戦による中断はあったものの現在に至っている。

4) アスレティズム

英国本土における19世紀半ばの教育活動の主幹をなすアスレティズム（Athleticism）により発展、普及したスポーツ活動は、それらを経験し愛好する英国人により、東南アジアを経由して開国後の日本に上陸した。特に神戸においては競技性の高いスポーツクラブが結成されたが、発起人の一人であるA. H. グループは、引退後の明治28年舞台を神戸居留地近隣の六甲山に移してスポーツ活動を中心とするリゾートを形成した。

5) カントリーハウス

明治17年（1884）欧州の貴族制度に倣って制定された華族令の発布によって新貴族となった山県有朋を始めとする日本政府要人は、土地所有後に農場経営を開始し、その拠点として農場拠点型別荘を建設した。このように那須高原に導入されたカントリーハウスの思想は、英国の地主貴族に倣って行われ、またその関係は、英国はエリザベス朝末期の新支配層と地方領土の事情に酷似している。

(2) スポーツ

《水辺スポーツ・レクリエーション》 日光の中禅寺湖や野尻湖では、開発当時から、水泳、ヨット、ボートなどの水辺レクが導入され、競技会なども開催されている。

《ゴルフ》 六甲山においても、日本初導入のゴルフを主体としたリゾートが開花した。雲仙、箱根、軽井沢などのリゾート地においても、都市郊外に先駆けてゴルフ場が開設された。

《登山》 欧州において生まれたアルピニズムは、明治22年(1889)神戸居留地に牧師として赴任したW.ウェストン(Walter Weston)によって敢行された日本有数の山岳への登山により初めて日本に導入された。六甲山への登山もこの影響が大きいと思われる。

《乗馬》 開国後来日した外国人は、近代的レクとして英国などで全盛であった競馬や、エクスカージョンの手段として、あるいは純粋なスポーツとしての乗馬を導入した。

(3) リゾートにおけるコミュニティ

明治中期より外国人を中心として形成が開始された軽井沢では、明治32年(1899)内地雑居制の施行とともに、外国人避暑客を主な対象とした宿泊施設の建設が相次ぎ、明治38年(1905)には、政財界にも明るい山本直良(第十五銀行役員)による貴族趣味的な三笠ホテルも完成した。この頃の軽井沢では、外国人避暑客に混じって華族や政財界諸要人などの日本の上流階級の姿も見受けられ始め、ホテルのティーラウンジやレストランにおいて居留地のホテルで行われていたような“社交”を開始した。次第に中央の華美な社交術が採用され、当初は外国人避暑客を対象に建築された諸ホテルであったが、その主役は日本の上流階級へと、またホテルは社交の場へと移行し、リゾートにおける“鹿鳴館”となった。

(4) 風景

リゾートの適地選定には気候条件と共に、風景的要素が重視された。開発の主役となった欧米人たちは日本の高原地帯の風景に彼らの故郷の風景を重ね合わせたようである。

《軽井沢》 避暑地・軽井沢の発見者であるA.C.ショウは、旅行途中に立ち寄った軽井沢に“故郷トロント”の風景を見出し、以後展開されるリゾートの

舞台と決定した。

《草津》 温泉に深い興味を抱いたE.V.ベルツは、草津に“チロルの村落”を思い浮かべ、また草津旅行の途次に存在する吾妻溪谷を愛でた彼は“アルプスの街道ヴィア・マラー”の様だと形容した。

《野尻湖》 野尻湖国際村の開発功労者であるD.ノルマンやA.P.マッケンジーは、野尻湖に“湖水の豊富なカナダ”の風景を重ね合わせ、水辺のない軽井沢から野尻湖へ移った。また、野尻キャンプの設営に尽力したE.R.カウフマンは、その基本として親友が経営するカナダのグレンバーナードキャンプを念頭におき適地選定を開始したが、基本としたキャンプ場から臨める“ガリラヤ湖の向こうに見える雪をいただいたヘルモンの山並”に“妙高山を仰ぐ野尻湖”の風景を重ね合わせ設営地を決定した。

《那須》 昭和天皇は欧州歴訪の際訪問したスコットランドに並々ならぬ愛着を感じ、帰国後那須にその風景を見出し御用邸の建築地と決定した。

(5) 建築

英国人は、高温多湿のアジアにおいてその過酷な気候の克服策として、現地の建築様式である“ベランダ”を取り入れ、結果的にはベランダを介して全部屋との連絡を可能とする“ベランダタイプのコロニアル”が成立し、またベランダにおける生活の比重が高い新たな生活様式も確立している。軽井沢や野尻湖に見られる新軽井沢バンガローと呼ばれる建築様式は日本の在来工法と欧米からのコロニアル様式の融合によって生まれたものと考えられるが、これに見られる“ベランダ”は、避暑生活における重要な活動の舞台として位置づけられており、そこで繰り広げられる避暑生活は、インドにおける英国人によるベランダでのそれと類似している。

5. まとめ

以上、述べてきたように、明治になるまで存在していなかった日本のリゾートの成立には、欧米のリゾートのあり方が様々な形で影響していることを明らかにした(図-5)。

1) 戦前の我が国における欧米のリゾート思想の影響を色濃く受け成立したリゾートは、軽井沢、日光、那須高原、野尻湖、大磯、箱根、六甲、雲仙などがある。

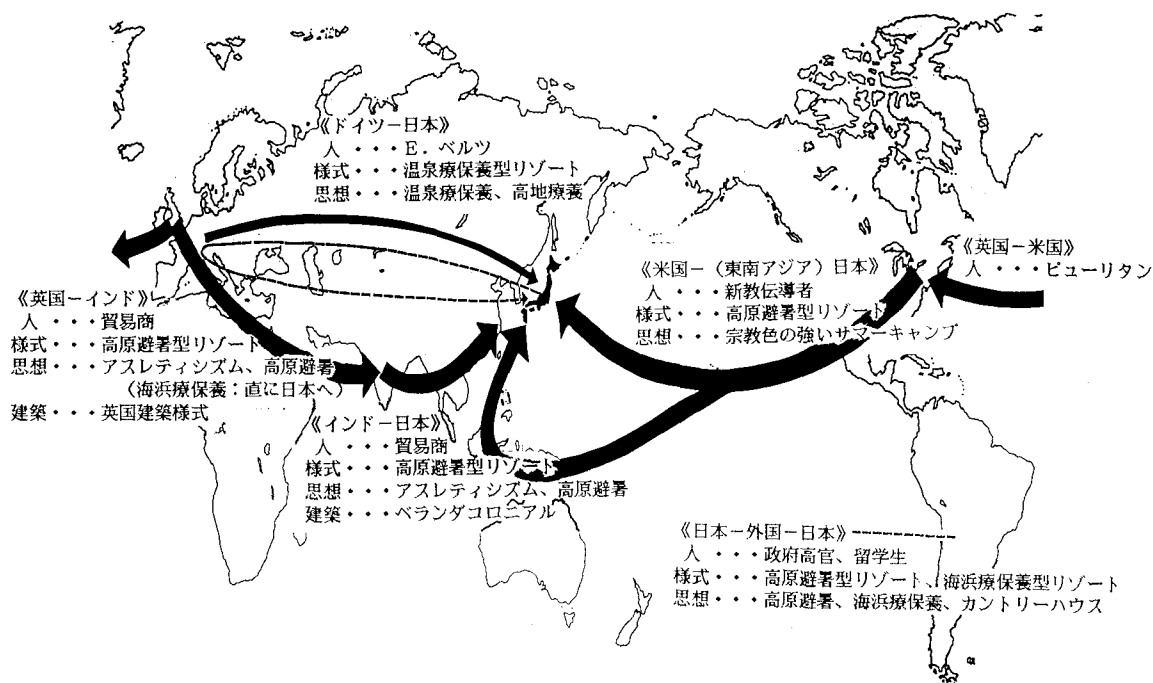
2) 当時海外において発展していたリゾートにはドイツのバーデンバーデンや英国のブライトン、フランスのニース、米国のキャッツキル、インドのシムラが存在し、同時期において日本に導入されたリゾートの形態に多大な影響を及ぼしたと考えられる。

3) 開国を機にリゾートを導入した人々には、A.C. ショウなどの宣教師をはじめとして、貿易商ではA. H. グルーム、またE.V. ベルツなどの御雇い外国人やその他の外国人要人として駐日外交官などが存在し、加えて当時の日本の近代化のために渡航した、日本の政府高官、医師などもリゾート成立に多大な影響を及ぼしている。

4) 日本におけるリゾートの形成には欧米諸国において発生したリゾート思想が受け継がれ、水辺レクリエーションを代表とするスポーツや社交、また建築様式やリゾートに対する風景観が導入され、それらを背景として欧米流リゾートライフが展開された。

【 参 考 文 献 】

- 1) 安島博幸、渡辺貴介、十代田朗：明治期の別荘の立地と様式に関する研究、日本観光研究者連合全国大会研究発表論文集、No. 1、1986
- 2) 十代田朗、渡辺貴介、安島博幸：明治・大正期における湘南および房総地域の臨海部別荘地の成立過程、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 20、1985
- 3) 西村真、渡辺貴介、安島博幸：わが国近代高原リゾートの成立と展開、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 22、1987
- 4) 穴戸 実：軽井沢別荘史、すまいの図書館出版局、1987
- 5) 西沢倫太郎、安島博幸他：野尻湖における高原リゾートの成立と展開、日本観光研究者連合全国大会研究発表論文集、No. 2、1987
- 6) 上垣智弘、安島博幸他：六甲山におけるリゾートの成立と展開、日本観光研究者連合全国大会研究発表論文集、No. 4、1989
- 7) 工代将章：ブライトン・ニース・カンヌにおけるリゾート都市の成立と展開、東京工業大学社会学部修士論文、1988
- 8) 佐藤 誠編：ドキュメント リゾート、日本評論社、1989
- 9) 日吉 淳、渡辺貴介、天野光一：フロリダにおけるリゾート地の発展形成過程に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 24、1989



(図-5) リゾートの導入とその内容